

“玄界島”

2023年8月。今年の夏は例年に比べ暑い。「観測史上最も暑い」というフレーズが船内の客室に設置された大型テレビから聞こえてきた。博多湾に面するベイサイドプレイス博多埠頭から出港した、玄界島行きフェリー「みどり丸」。右手に、歴史の教科書でおなじみの「漢委奴国王」と刻まれた金印が発見された志賀島、左手に博多湾の真真中にポツカリ浮かぶ能古島を眺めつつ、船は博多湾を北西方向へゆっくりと進む。この日の湾内は穏やかで波はほとんど無い。玄界島近海で行われる定置網漁撮影のため、大都会福岡から35分間の船旅だ。

到着まで残り10分を切ると船の揺れを感じ始めた。博多湾を出て波が荒い玄界灘に出たようだ。博多湾の出入り口を玄界灘から見張るような位置に、お椀を伏せた形で浮かぶ玄界島が眼前に迫ってきた。

福岡県西区を住所とする玄界島は、最高海拔218メートル、周囲約4km（徒歩1時間で1周できる広さ）の小さな島である。人口は約350人で多くが漁業を産業としている。港へ入ると南側の斜面に沿って、建てられて間もない住宅や建物が並んでいるの見える。今から18年前の2005年3月20日、マグニチュード7.0、最大震度6弱の地震が島を襲った。福岡県西方沖地震である。この地震で家屋の約7割が全半壊する多大な被害を受けた。全島民が福岡市内に避難する事態となったものの、その後、島民と行政が一丸で復興に取り組み、わずか3年後の2008年には復興事業が完了。今の玄界島へと姿を変えた。

博多湾の全貌を望む山頂からの眺望は絶景で、北は雄大な玄界灘を一望でき、南はドーム球場や福岡タワーなど福岡市内の建物が見え、西は糸島半島

を、東は志賀島を眺めることができる。

そんな玄界島には、福岡市内からわずか35分の別世界を堪能しようと釣り客や登山客、夏場には海水浴客も訪れる。さぞかし賑やかな島かと思いきや、意外な事に予約制の飲食店が1店舗あるのみ、売店も1店舗のみである。もちろん公共Wi-Fiなどは飛んでいない。いわゆる不便な島なのだ。しかし、この不便さがかえって良い。

島に一歩降り立つと、時間の流れが止まったように感じる。人工的な音が皆無なのだ。強いてあげれば漁船のエンジン音が響くくらい。聞こえてくるのは波の音、風の音、トンビと猫の鳴き声、そして人間同士の会話だ。我々が普段、いかに人工的な音に支配されているか。島にいますとスマホを手放したくなる衝動に駆られた。

“出港”

島に着いた我々取材チームを迎えてくれたのは、真っ黒に日焼けした宮川友芳さん(37歳)だ。「船、準備してますから、このまま出ましょ!」。フェリーの停泊する船着場と漁港は目と鼻の先にある。30メートルほど歩いて向かった先には、出港の準備が整った宮川さんの所有する漁船「福玄丸」が係留されていた。福玄丸は長さ約13メートル、幅約3メートル、重量約4トンで、船としては小型である。宮川さんの父・智行さん(66歳)の操縦のもと、我々は漁場へ向け出港した。

雲ひとつない空と海の青。玄界島を左手に見ながら福玄丸は波を切る。照りつける8月の太陽は容赦無いが、海風がそれを軽くする。この日の海はいつもと比べ穏やかだという。それでも揺れる船上で立っていると、足元はおぼつかず、必死に手すりを握りしめる。

一方、宮川さんは船上で腕を組み仁王立ちだ。微動だにしないその姿に漁師の体幹の強さを思い知った。

“定置網漁”

出港から10分程で船は漁場に着了。島から1km弱離れている沿岸での定置網漁が宮川さんの漁法だ。定置網漁とは、文字通り、海中の定まった場所に網を設置し、回遊する魚を誘い込む漁法だ。海中に沈めた網を漁船で引っ張る「底引き網漁」のように積極的に魚を追いかける漁法とは異なり、いわゆる「待ちの漁」と言われ、魚を捕りすぎず持続的で環境にやさしい漁法だ。

定置網の全長は120メートルで、回遊している魚をささげる「垣網」と、垣網に沿って誘導された魚が入る「身網(袋網)」によって構成されている。潮の流れに沿って泳いできた魚は、直線に伸びた180メートルの垣網(障害物)を避けるため進路を変更する。そうすることで身網の中へと誘い込む。

身網の中に誘い込まれた魚は網の中を回遊しながら、その一部が「登網」と呼ばれる通路を通り、より奥にある檻型の「箱網」に入り込む。箱網は一辺が4~9メートルの箱状で、水深15~20メートル辺りにある。一度箱網に入ってしまうと、その構造上、魚は外へは出て行きにくくなっている。この箱網を引き上げる事で魚を生け捕りにする。(詳細はイラストページに掲載)

歴史は古く、室町時代末期に誕生し、江戸時代末期には現在でも用いられる形に整った。先人の知恵が詰まった漁法でもある。

持ち場に着いた宮川さんは海上を見渡した。黄色いブイがいくつも浮いている。そのブイの位置で箱網が設置されている場所が確認できるという。

数日前に仕掛けていた箱網を船上の巻き上げ機を使って慎重に手繰り寄せ始めた。箱網が徐々に引き上げられてくる。玄界島の海は透明度が高く、4~5メートル下まで見通せる。箱網が引き上げられるにつれて網に掛かった魚の群れが見え始めた。

魚群が海面に近づくにつれ、その多様さに驚かされる。タチウオ、アジ、イサキ、イカ、タイ、それ以外に見た事のない魚も少なくない。海面に姿を表し始めた魚たちは、一斉に勢いよく跳ね回る。“ピチピチ”という表現がびつたりだ。手繰り寄せた箱網を海中に留めたまま船体にいったん横付けし、簡易的な生簀状態に仕立て上げる。そこからタモ網を使い、魚をすくって船内の水槽に移していく。魚種ごとに分けながら手際良く作業は続く。

その最中、宮川さんはおもむろに小ぶりな魚を海に戻し始めた。「子供の魚は捕らないです」。宮川さんは汗を拭きながら口を開いた。資源保護の目的で未成熟な魚はリリースするようにしている。日本全体の漁獲高は年々減少している。その要因の一つに乱獲があるという。魚が存在してこそ成り立つ漁師の生業。宮川さんなりのこだわりだ。

1時間ほどで漁は終了した。気がつくとお裾分けにありつこうとカモメが頭上を鳴きながら飛び回っている。沿岸での定置網漁を体験し感じたのは、捕れる分だけを頂くという“足るを知る”精神が根底に存在していることだ。この日は大漁ではなかったという。ともすると、次はもっと多く捕ってやるという意識が働きがちだが、定置網漁では魚がやってくるのを“待つ”しかない。その心のゆとりが作業にも現れていた。そして、一連の営みには、島にいたとき以上に人工的な音がなかった。波と風と生き物と人間が交錯する音のみが支

配する世界。その時間が実に心地良かった。

“未利用魚”

港に戻ってからも仕事は続く。漁師の仕事は魚を捕って終わりではない。魚種によっては神経締めを行う。神経締めとは活け締めの一つで、魚の鮮度と美味しさを保つために、背骨近くを通っている神経にワイヤー状の専用器具を通し、神経を壊す締め方だ。一匹一匹手作業で行われる。少しでも高付加価値で市場に出す工夫であり、怠ることのできない作業工程である。

さらには、魚種と大きさごとに仕分けして箱詰めする作業も漁師の仕事だ。宮川さんは、市場に出荷する魚、直接飲食店などに送る魚、干物などに加工する魚を魚種ごとに手際よく仕分けしていく。

作業が進むにつれ、脇の方に放置されている魚があることに気付いた。「市場に出しても値がつかないですよ」。宮川さんは説明してくれた。大きさがバラバラ、見た目が悪い、加工や調理がしにくい、といった理由で売れない魚がある。それらを「未利用魚」と呼ぶ。農産物でもよく耳にする「規格外品」と言われるものである。場合によっては水揚げした魚のうち9割ほどが未利用魚の時もあるそう。この未利用魚問題は漁師にとって悩みの種でもある。

港で作業する傍ら、その未利用魚をマジマジと見つめる一人の男性がいた。「宮川さん、これ唐揚げにすると美味いんですよー」。そう言って、親しげに声をかけてきたのは、井口剛志さん(28歳)。株式会社ベンナーズの代表取締役である。井口さんは未利用魚を直接漁師から買い付け、それを加工しミールバックにして、定期購入(サブスクリプション)の仕組みで販売する“Fishlet:フィッシュル”(以下フィッシュル)というサービスを提供している。福岡市

東区にある創業5年目のスタートアップ企業だ。

定置網漁では、何が網にかかるかはわからない。ある統計によると全国の水揚げ高の3割ほどが未利用魚であるという。想像して欲しい、皆さんの仕事で販売したものの、作ったものが7割しか売れなかったらどうなるか。農業において規格外品問題は顕在化しており、フードロス問題としてよくニュースでも取り上げられていて、解決のソリューションもよく耳にする。しかし、漁業にも似た問題がある事は意外と知られていない。そこに気付き、行動を起こしたのが井口さんであった。この二人の出会いについては、もう少し後に紹介したい。

“ご縁”

今からちょうど1年ほど前、読者のTさんから私のもとに一通のメッセージが届いた。「玄界島で面白いことやっている漁師の友人がいるんですが、会ってみませんか」。この文面と、添付されている記事を読み、「面白そう!」と直感的に思った私は、「是非ともお会いしたい」とすぐにレスポンスした。

数日後、初めての玄界島で宮川さんとの初対面。話して5分も経たない段階で、「確かに面白い!」と体感。その後飽きることなく1時間ほど語り合った。語り合っている最中ふと思った。「そう言えば、この人は漁師だった」。つまり、途中から漁師と話している感覚が無くなったのだ。一言で言うところ“起業家”と話している感覚に陥った。

彼の思考の源泉はどこにあるのか、彼の価値観はどうやって形成されたのか、そして彼は何を目指しているのか。その興味がムクムクと湧き上がった。そこから1年に及ぶ長い取材が始まった。



領域を広げ、噛み合わせる潮流

特集

定置網漁

玄界島の漁師
宮川友芳

文：梶原圭三
写真：川上和禎